

ぼちぼちういんか

ワインの旅 白ワインとヴェール

伴 勇貴

シャブリ・ムスカデ

僕が最初に行った外国はフランスで、三〇年以上も前のことである。仕事でパ
リに二週間ほど滞在した。今では想像できないが、出発前夜、課内で歓送会が行わ
れ、当日は数名が羽田空港まで見送りに来た。「元気でやってこい」「水に気を付
けろ」などと声を掛けられてDC8に乗る。アンカレッジで給油のため数時間待
たされ、北極圏を経由する「北回り」で二〇時間ぐらいかかったと思う。

この最初のパリ滞在中にワイン、なか
でも白ワインの味を覚えた。ご馳走にな
った生牡蠣なまがきと白ワインに感激した。当時
の日本では、気取ってウイスキーを飲む
としても「トリス」。「角」かくなどなかなか
手が出ない。日本酒も防腐剤の入ったも
のが普通である。そんな世界からすると、
美味いモノづくしの別世界だった。青カ
ビの生えたチーズもオニオングラタン・
スープも、そしてパンですらも驚きだっ
た。

「シャブリ」(Chablis)とか「ムスカデ」
(Muscadet)を覚えた。いずれも辛口のさ
っぱりとした白ワインで、なかでも「ムス
カデ」は安かったので、定宿のホテル近く
の酒屋で買っては飲んだ。



土日は寸暇^{すんか}を惜しみ、エッフェル塔や凱旋門^{がいせんもん}に登り、セーヌ川沿いを散策する。シャンゼリゼやモンマルトルの丘を歩き、ルーブル美術館に入り浸る。ムーラン・ルーージュにも行く。それと白ワインで、すっかりパリの虜^{とりこ}になった。

お土産は「ジョニ黒」二本、タバコ「ダンヒル」一カートン。数冊の成人本、それと「ビツクのライター」とチョコレートだったと思う。「ジョニ黒」を開け、スルメとピーナスなどで帰国歓迎会をやる。あつと言う間に、酒はなくなる。すると「トリス」を「ジョニ黒」の瓶^{びん}に入れて飲む——そんな時代だった。



「学生王子」——Drinking Song

この初の海外旅行から戻り、半年も経たないうちに、今度はドイツ、フランス、イギリスを周り、航空機開発政策に関する現状調査をしてこいと命じられた。最初のフランス行きときは一行四、五人だったが、今回は一人である。

それで報告書を提出しろという。大変な作業になりそうだった。行けばワイン

にありつけるとは思うものの、気が重い。そこで出発までの一ヶ月に、日本で入手できる新聞や専門雑誌などを克明に調べた。フランス語とドイツ語の資料は数字を拾うぐらいしか僕には利用できない。もっぱら「フィナンシャル・タイムズ」と「フライト」、「アヴィエーション・ウィーク」を頼りに情報を収集・分析し、まとめた。要求の八割以上に応える報告書を事前に完成させた。現地では不足分を調べるだけで済む———そう分かったら、気持ちが一気に楽になった。この事実を伏せ、羽田から再び見送られて飛び立った。

二回目となると余裕がある。大学時代の友人に頼み、北極圏を飛行する時、コックピットに入れてもらった。オーロラが見えるかもしれないからだ。運が良かった。前方に立ちほだかり、ゆつくりと微妙に色と形を変えながら動く赤紫のオーロラ。コックピットの窓全面をオーロラが覆う。高度約一万メートルを時速七〇〇キロあまりで移動しているとは思えない。「凄い」と叫んだきり、言葉が出てこない。「今日は綺麗ですね。まあ、コーヒーでも、どうですか」というパイロットの言葉で我に返った。

今では、とつても許されないことだ。その後、数回、オーロラを見た。しかし、この時のオーロラほど素晴らしいものは見たことがない。今でも昨日の出来事のように覚えている。

デンマークのコペンハーゲン経由でドイツに入った。コペンハーゲンで、最初



の目的地、ハンブルグへの乗り継ぎに三時間あまり待たされる。若くて元気そのもの、その時間が惜しい。どうやって行ったのか覚えていないが、アンデルセン童話に出てくる「人魚」の像を眺め、波止場の屋台で買ったニシンの酢漬^{はき}けを挟んだパンを頬張^{ほおば}り、うろついた記憶がある。

ハンブルグでは知人の手配で民宿に二泊した。旅費が少ないからだ。アルスター湖という美しい湖に近い家の三階の屋根裏部屋で、風呂はなく、二階でシャワーを浴びる。しかし、清潔で快適で、簡単な朝飯を一階で食べさせてくれる。未亡人が一人で切り盛りしているようだった。肝心の仕事は、知人が手伝ってくれたこともあつて、あつけなく終わった。時間に余裕ができ、有名な「飾り窓」を案内するといふので付いて行った。刺激的なところだったが、金も度胸もなかった。翌日、朝一番に起き、朝食前に湖畔を走り、気分を一新して次の目的地に向かった。

向かうところはデュッセルドルフである。国内線に乗ってデュッセルドルフ空港に降りた。その時、ドイツは初めてなのに、フランスほど緊張していない自分にフツと気づいた。海外が二度目だという理由だけでも思われない。多分、大学で第二外国語としてドイツ語をやったためだろう。意味はともかく、「音」にあまり違和感がない。当時は結構ドイツ語を覚えていた。目に入る言葉にも馴染みがあったし、フランスと比べると英語が多いのも楽だった。改めてドイツに来たのだと実感した。

ここでも仕事は直ぐに終わった。見聞きしたことと集めた資料に基づいて、持ってきた報告書の原稿をホテルで加筆訂正したら完了だった。集めたものは添付



資料にすれば済む。「これでドイツは終わりだ」と思ったら、急に喉が渴かわいてビールを飲みたくなった。ホテル近くの大きなビヤホールに飛び込んだ。金曜日だったためだろう。混んでいた。気が付いたら、周囲のドイツ人と一緒になってビールを飲んでいた。いきなり話しかけてきた。ドイツ語と英語である。

「お前、日本人か？」

「そうだ！」

「イタリアを入れなければ、俺らアメリカに勝っていた！」

「それは分からない！」

「いや勝っていた」

「良いからお前、飲め！」

「乾杯！」

「乾杯！」

多勢たぜいに無勢むぜいである。続いて、訳が分からないままガヤガヤとやった。最初のやり取りしか覚えていない。後のやり取りは定かではない。馬鹿でかいバケツのような陶器製のジョッキで回し飲みが始まった。ヤンヤヤンヤの囃はやし声で順繰りに飲む。そして肩を組んで歌う。ついには数十名の大合唱となった。「歌声喫茶」のノリである。

その中でも記憶に残っているのはミュージカル「学生王子」の数曲である。大学時代合唱クラブでやった。当時は歌詞もきっちり覚えていた。英語と日本語を適当に使い分けて歌った。



「学生王子」―「Student Prince」。 「アルト・ハイデルベルク」という戯曲を基にしたミュージカル。カールスブルグ公国の王子、カール・ハインリッヒは学齢に達したため、当時の慣習に従って、他の貴族の息子たちと同様、大学に行くことになる。入学試験を受け、めでたくハイデルベルク大学に入学が決まる。

王子は、学生の町、古城の町に胸を踊らせる。初めての城外生活である。王子は、いつも若い学生たちで賑わっている宿に下宿する。そして下宿屋の娘と恋に陥る。王子は、同僚の学生たちに囲まれ、歌とワインと歓声の幸せな学生時代を過ごす。しかし、ある日、カールスブルグ公国より使いの者がくる。大公が大病気にかかり、すぐに帰国するようにとのことだった。一年間予定の大学生活を途中で終えなければならぬことに悩むが、国政を考えて帰国を決意する。しないわけにはいかなかった。王子はケティとも悲しい別れを交わし、ハイデルベルクの町を後にする。

それから数年経ち、カール・ハインリッヒはカールスブルグ大公となる。気の進まぬ政略結婚を間近に控え、悲しみに沈んでいた。下宿の娘に対する思いが募り、青春のわずかな時を過ごしたハイデルベルクへ向かう。しかし、時は移り、世の中は変わり、昔の同僚も大公となった彼にはうち解けない。

その中で変わらないのは下宿の娘だった。しかし、彼女も結婚が決まっていた。彼女は言う。「私たち二人は、どうしようもなかったのよ。そうでしょう。私たちはいつもそのことを知っていたわね」彼は「僕のハイデルベルグへの憧れは、君への憧れだった」と言い、過ぎ去った青春を思い出しつつ、ハイデルベルクを後にし、新しい人生に向かって歩いていく。

だいたいそんな内容のである。話そのものは「ローマの休日」の逆バージョンのようなたわいないものだが、曲は悪くはない。その中のビヤホールに向いている「Drinking Song」や、その「フィナーレ」――冒頭が「我が行く道は遙^{はる}けき彼方 ……」――を歌った。誰が始めたのか定かではないが、これらの大合唱が始まった。身体を曲に合わせて動かしながら、大声で歌う。気分爽快なひとときだった。

なお、インターネットで探したところ、歌詞が載っていて曲も聴けるホームページを見た。次に紹介するものは、そこから引用したものである。

(http://homepage1.nifty.com/koarashi/midi/student_prince/student_prince.htm)

海外のホームページもあった。歌詞はないけれど、歌や曲が聴ける。

「Marching Song and Drinking Song from "The Student Prince"」

(<http://www.ugcofny.org/sounds.asp?action=all>)

「Deep in My Heart Dear」 「Golden Days」 「Students Marching Song」 「Drinking

Song」 「Serenade」 「Finale」 など。

(<http://www.iclassics.com/iclassics/album.jsp?selectionNum=4400187322>)

一度、アクセスしてみてもうだろうか。一度は聴いたことがある曲だと思う。

ライン・ワインとモーゼル・ワイン

ドイツに入ってからというもの、ビールばかり飲んでいたが、ついにワインを飲む機会が訪れた。馬鹿騒ぎで、翌日は二日酔い気味だった。しかし、早く起き、勧められていたラインの船遊びに出かけた。ドイツでの仕事は終わったし、土曜日である。ライン川上流のマインツまで行き、そこからコブレンツまで下るのが常道だそうだが、時間も限られているのでコブレンツからたくさん出ている周遊船に乗ることにした。ホテルで聞いたなら、列車でコブレンツまで行けば、直ぐに分かるという。

デュッセルドルフから列車に乗った。空いている。窓際の席に陣取り、ポケットと風景を眺めることに決め込む。写真でしか見たことがない風景が目の前に広がっている。いくら眺めていても飽きることがない。風景は流れているのに、時は止まっているような妙な気持ちである。二日酔い気味だったのも、コブレンツに着いた時にはすつきりしていた。



上の地図で分か

る通り、コブレンツは、ライン川にモーゼル川が流れ込む辺りに位置し、上流には有名な「ローレライの岩」がある。

切符を買って観光船に乗る。天気は快晴。周囲の人にならって上半身裸になる。

気分は最高である。そしてワインを飲む。ライン・ワインとモーゼル・ワインの両方を飲む。美味かった。

川幅は広く、黒く濁った水流は穏やかである。長い金髪の美少女が岩の上で歌い、船の男たちを惑わせて座礁させ沈めたという伝説の「ローレライの岩」は小さい丘という感じである。やや期待はずれだったがけれど、緑の中に点在する城は期待した以上に綺麗だった。ともかく船上での気分は爽快そのもの。ワインもパリで口にしたよりも何倍も美味い。ワイングラスを片手に聞こえてくるメロディに合わせ、ドイツ語で「ローレライ」を口ずさむ。実に贅沢な時間だった。

作詞 ハイブリッヒ・ハイネ 作曲 ジルヘル
訳詞 近藤 朔風

なじかは知らねど 心わびて
昔の伝説はそぞろ身にしむ
寂しく暮れ行く ラインの流れ
入り日に山々 赤く映える

美わし乙女の 巖頭に立ちて
黄金の櫛とり 髪の乱れを
梳きつつ口ずさむ 歌の声の
くすしき魔力に魂もまよう

漕ぎ行く舟人 歌にあこがれ
岩根も見やらず 仰げばやがて
波間に沈むる 人も舟も
怪しき魔歌 歌うローレライ

以来、ドイツに何度も行った。ライン・ワイン、モーゼル・ワインを飲む機会も
多く、少しは知識を持った。



ドイツ・ワインの約八五%は白ワインで、主な生産地は大きく分けてラインと
モーゼル。ライン・ワインはモーゼルと比べると濃厚。普通、茶色のボトルに詰め

られている。モーゼル・ワインはラインと比べるとやや淡泊で酸味が強い。値段も割安。普通、緑色のボトルで売り出されている。

だいたい、こんなことが言われている。振り返ってみると、白ワインが好きだったところは、まさにモーゼル・ワインが飲みやすく好きだった。

ところが次第に物足りなくなつた。最近では、日本酒の質も格段に良くなつたので、白ワインを飲むくらいなら日本酒の方がはるかにましだと思ふようになってくる。魚介類だからといっても、よほどのことがない限り、白ワインは選ばない。

そして気が付いたら、「なじかは知らねど」ドイツ・ワインに対する関心はなくなり、ノスタルジアの世界のものになっていた。ドイツ・ワインが好き人には、何も知らないのにと馬鹿にされるのだろうか……。

(二〇〇三年夏)